

ま と め

木簡に記された内容は他の文献に記されているものと対比すると量的にも多くないし、内容もあまりくわしいとは言えない。しかしここに書かれている内容や、信頼性はかなり高いものであると言って良いであろう。

たとえば「天皇」の嫡子にのみ用いる「親王」という用語が「長屋王」にまで及んでいたこと。当時の高貴の人は、犬を飼ったり、鶴を邸内に飼育したり、食生活にしても、かなり自給自足のできる豪華な生活をしてきた様である。

当時の庶民の生活と対比してかなり優雅で薬物や医師のことにしても十分な配慮が払われた中で生活していることが判る。

(平成三年二月例会)

横浜医学史細見

中西 淳朗

この七、八年、横浜の医学史を研究して来たが、基本的な課題であるのに、研究されていない問題点がいくつかあるのに気づき、今回その一部を報告した。

一 ヘボン先生に神奈川で日本語を最初に教えた日本人

ヘボンに神奈川で日本語を最初に教えた日本人について、昭和五十二年に『神奈川区誌』編集委員会は、竹口信義のかいた『横浜の記』から本多貞次郎という医師を割り出した。

しかし、貞次郎の人物像が不明瞭でどの様な医師であったかは不明であった。

一方、ヘボン研究の最高峰である高谷道男氏（桜美林大学名誉教授）は、貞次郎はヘボンの下僕でありスパイ、刺客であったと低い評価を下している。以上の落差を、竹口信義から兄の竹川竹斎宛の手紙（文久元年二月三日付）の写を射和文庫所蔵の竹斎「反古帳」から見出し、これでうめることが出来た。

即ち、この手紙によって、貞次郎は京ヌキナ先生（貫名海屋・安永七年〜文久三年、小石元俊、元瑞らと交際のあった漢詩人で養生家と思われる）の門人で、勝利見（すぐる・りけん、増上寺の僧で人相見と「八門遁甲の法」という占術ができる老人）を親としてヘボンの下に入ったことがわかった。

一八六〇年二月十九日のヘボンの日記と、『横浜の記』の貞次郎の記事とは内容がほぼ一致しており、貞次郎がヘボンに神奈川で日本語を最初に教えた日本人だと言える。

しかし、本多貞次郎の家業乃至は本職を医というには少々経歴があやしい。

ヘボンはそれを見抜く力が秀逸で、二カ月半にして貞次郎から日本語を習うことを止め、新たに弥五郎（姓不明）という医師を日本語教師とし、貞次郎は下僕専一となった。

二 ニュートンとヒルの検梅事業成績

G・B・ニュートンは、慶応四年四月十二日より吉原町遊廓で明治四年十一月まで検梅を行った。その成績については、今井忠宗氏の「我国検黴駆黴の端緒」（千葉医専誌・大正四年五月）に

くわしい。たまたまニュートンの後任ともいえるG・B・ヒルの
 検梅成績を「横浜毎日新聞」の明治七年二月四日号に見出したの
 で、両者を比較した。

ニュートンのかかわったザ・ロック・ホスピタルは、約一五〇
 床の病院とみられ、ヒルのかかわった高島町病院の規模は三〇床
 以上（この前月に開院したため数は少い。半年後は八八名の入院
 を数える）であるが、この兩人の業績に基本的差異をみとめる。

即ちニュートンは梅毒を入院させることで手一杯であり、一五
 七名の淋疾まで入院させていない。ヒルは性病は勿論、性行為感
 染症と思われる患者まで入院隔離した。ヒルは表にみるごとく、
 入院対象の幅をひろげるほど遊女の性病罹患率が下がることを強
 調したかったものと考ええる。

表 横浜における性病統計の一部

	ニュートン	ヒル
時期	M2年1月分	M7年1月分
総患者数	3,084人 検梅 737人 (23.9%)	1,540人 検梅 30人 (1.9%)
入院患者	軟性下疳 0 梅毒原発症 54人→54人 全身梅毒 70→2 計 56	軟性下疳 12人 皮膚梅毒 1 子宮潰瘍 1 梅毒痔脱 1 梅毒性贅肉 1 淋疾 13 計 30
入院総数	1.8%	1.9%
他院退院	退院 70 未治繰越 79	愈 8 未治繰越 22

三 松山不苦庵について

『横浜軍陣病院の日記』を再読するうちに、G・B・ニュートンの助手であった松山不苦庵は、慶応四年五月晦日から軍陣病院の薬局諸器械出入等取締に任ぜられていたことがわかった。また前出の今井氏論文等によって、同年八月三日からニュートンの助手となり検梅事業に参加し、この月に野毛勘定役所周辺の一戸を貸与され住まった事もわかった。

ところが、不苦庵が記したと考えられる経歴書が『神奈川県史料・第八巻』九四頁に存在していた。それによると、彼の旧所属は前橋藩ではなく館林藩である。そして明治元年四月二十三日に横浜表病院外国医師手習御雇を拝命、同年十一月二十三日に属司試補席医官を申し渡され、同二年十一月二十六日に権少属に任ぜられ、同四年八月二十六日に大阪府へ御用あり出張、とある。

大阪府は娼妓強制検黜院を明治五年五月二日に大坂病院から分離し開院している。院長は松山棟庵と従来から書かれてきた。

しかし、松山棟庵の明治六年の自筆履歴書（『図説・慶応義塾百年小史』収載）によると、棟庵は慶応二年十二月より明治元年八月まで福沢諭吉塾で英書を学び、同年八月より同二年十一月まで横浜在留医師へボン氏に学ぶ。同年□月より同三年十二月まで紀州和歌山にて医を業とし傍ら英書を少年に教える。

明治四年正月より同年十一月まで文部省へ出仕し、同十二月より明治五年六月まで豊前中津の市校で英書を少年に教え、同年七月以来慶応義塾中にて翻訳読書云々、であった。

即ち、不苦庵と棟庵とは全く別人であって、従来の文献には両

者の混同がおびたしい。

ただし、不苦庵の出自等について解明する必要がある。

(平成三年一月例会)

◇◇◇◇◇ 紹 介 ◇◇◇◇◇

アレクサンダー・コーン著、酒井シヅ・三浦雅弘訳

『科学の異』

自然科学者や医学者ほど地位や名譽にこだわり、功名心の強い人間はいないとよくいわれる。本来なら真理を追求することが唯一の目的であるべきなのに、実際はそうではないことへの非難として持ち出される文句である。

確かに、その非難には一理があり、私の周りを見てもそれに該当するような例を見ることが少なくなく、どろどろした医学研究者社会の状況に辟易することも再三である。

しかし逆にいって、真実だけを知るために研究し、功名心などは念頭にないという学者が存在するのであろうか。もちろんそのような純粋な学者がいなければいけないが、いたとしてもおそろくごく少数派に属するにちがいない(しかしここでは臨床の医者のごときは考えないことにしよう)。なんとすれば、地位や世間の意味での力がないとたとえ国の予算であれ獲得できないという研究費の現状ひとつとっても、真理、真実を求めることだけが研

究者の道といった夢のような話はないからである。かつてのよき時代はともかく、それが現代という時代の最大の特徴である。

むしろ、露骨に言えば、研究者の大方は、地位や名譽の獲得や功名心を大きなモティーフとして、真理、真実への追求に全力をそそぎ、地位や名譽が得られればさらに真理、真実への道を拡大していくというべきなのかもしれない。

研究という科学者の行動には、主体が個人であれ、グループであれ、ある種の密室性がある。ある実験を行い、その結果を公表するとする。その目的、方法、対象に問題がなく正当であるとすれば、その数値、あるいは文章の表現として出された結果については、研究者の発表のままに信用するのが建前である。研究者の権威が高ければ高いほどその信用性も高い。いずれその実験に対しては追試がなされ、その正否について論じられることになるが、発表時においてはただそれを信用する以外はない。つまり、研究者の間には、われわれは実験にはすべて正直で、得られたありのままのデータを報告しているという暗黙の前提がある。K・S・ノリスによれば「科学とは科学者が相互に嘘をつかないようにするルールの集合である」というわけである。

ところが、地位や名譽にこだわり、研究費の獲得に精を出し、業績の先陣争いをするあまり、自らの実験データや観測記録をごまかすという事態が生じてくる。追試などによっていずれは判明するはずであり、いずれはごまかした研究者は科学や医学の世界から追放されていくことになるが、ただ被害はそのような個人の